

連載

## フィールド・アイ Field Eye

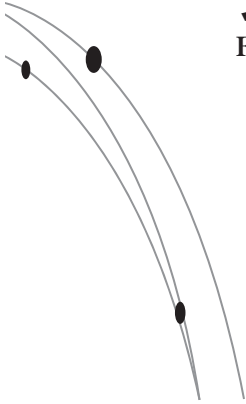
アムステルダムから——②

アムステルダム自由大学  
ヤン R. マグナス

Jan R. Magnus

(訳) 大阪大学 生藤 昌子

Masako Ikefuji



### 研究活動における不正行為

ディーデリク・スターベル (Diederik Stapel) のケース

研究活動における最も有名な不正行為は、社会心理学者であり、ティルブルグ大学社会科学部教授であったディーデリク・スターベルのケースである。2011年にこの事件が起きた時、私は彼と異なる学部のエコノメトリクスの教授であったが、同じ大学だったので、その後について内部事情を知ることができた。

スターベルは *Science* や他の一流学術誌に数多くの業績を発表している、我々のスター科学者の一人であった。彼は市民が一般的に考えそうな仮説を実証的に証明することができた (後に証明は偽りであることが明らかになったが)、心理学の“人気者” (“golden boy”) だった。例えば、彼はベジタリアンがある精神的特徴を持っていると考えた。ベジタリアンは親切で話し方が穏やかで、路上でも老婦人を助けてあげる、などなど、一方、そうでないミートイーターは大きな声で話し、下品で信用できない、という仮説である。ベジタリアンである私にとってこの仮説は魅力的であり、スターベルが彼の主張を証明できるほど多くの実証的観察を示せたことに、私は良い気分だった。

ところが2011年8月、スターベルが長年にわたりデータを捏造していたことが明るみに出た。スターベルの助言を受けながらプロジェクトに従事していた3人の若い研究者がこの捏造を見つけたのだった。彼らは学部長のところへ相談に行くことができなかった。なぜならスターベル自身が当時の学部長だったからだ。そこで総長——最高権限を持つ人物——に話をし

に行った——この若い研究者たちは、とても思い切った手段を取ったのだった。総長は大学近くの、スターベルと同じ地域に住んでおり、一緒にテニスをしたりしてスターベルのことをよく知っていた。

新聞社がこのスキャンダルを知る前に総長が詳細を把握し、スターベルを解雇するのに、わずか2日間しかかからなかった。このことは学会から多くの称賛を得て、大学の評判へのダメージを最小に抑えた。

彼の研究活動における不正行為は、遅くとも2004年からデータの改竄や、実験全体の完全な捏造が行われていたことが明らかになった。不正なデータは少なくとも30の公刊された査読付き学術論文で使われていた。

### 倫理委員会

ティルブルグ大学は研究活動における不正行為について申し立てを行う正式手続きがないことに気づき、コンフィデンシャル・カウンセラーとして1人の教授を指名し、カウンセラーがさらなる調査を必要とする と判断した場合、その申し立てを調査する3人の倫理委員会を任命した。私はこの委員会に6年間従事した。ティルブルグ大学の後に続いて、オランダの他のすべての大学が同様の委員会を設立した。

委員会の役割は研究活動における不正を調査することであって、不正のほとんどは剽窃かデータ捏造のいずれかだが、どちらかに限定されるものではない。我々は侮辱的で不適切なセクシャル・ハラスメントについては、他の委員の仕事であるので調査は行わなかった。

### グリリカス (Griliches) の話

私たちの委員会はスターベル教授自身には関係していないが、彼の不正行為の余波に対処しなければならなかった。スターベルと一緒に研究活動を行っていた博士課程の学生とテニユアのない助教がいたのだ。執筆途中であった論文は無用なものになり、公刊論文は今やその公刊を撤回されて彼らの履歴書から消え、したがって、テニユア獲得が近づいている助教たちに深刻な影響を及ぼした。不正に対する責任をスターベルだけが負うのは当然であると、一般には考えられた (私も当然その通りだと考える)。我々委員会は、これらの共著者たちに対してどのように取り扱うかを判断しなければならなかった。

その時の、そして今でも私の考えは、たとえ共著者が論文のある特定の部分について何も寄与していなかったとしても、論文全体について共に責任を負うべきである、ということだ。ハーバード大学のツプィ・グリリカス教授はかつて私に以下のような話をしてくれた。

例えば君が骨の構造と、骨の一定の特徴の運動能力に対する影響について研究しているとしよう。君の共同研究者がエチオピアにいてデータを集め、このデータを基に統計的分析をし、続いて共同研究者と共著を出版する。そして、そのデータが捏造でないにしても、その論文を無価値にしてしまうような間違いが明らかになったとする。もし、これが経済学のプロジェクトだったとしたら、ほとんどの研究者は無実を主張し、データについては何も関わっていない、と言うだろう。しかし、自分自身でデータを集めることが、はるかに一般的で重要な社会科学では、例えば君がデータ収集に関わっていなかったとしても、君は共に責任を負うことになるだろう。

グリリカスの話に私は強い感銘を受けた。経済学ではデータ解析手法の開発やデータを実際に収集することは、未だにかなり過小評価されている。これはデータを用いて何をするのが重要であって、データ自体はそれほど重要でない、という間違っただけのシグナルを若い研究者に送っている。そして、とても危険なシグナルである。なぜなら、データを完全に理解することがすべての実証研究の根底にあるべきだからである。データは目の前の課題に対して理想的に適合するようなエラーのない、バイアスのない数字ではない。一般に、データは制約や事前に信念を持つ人によって構築される。効果的にデータを研究に使う前に、これらの制約や事前信念を理解している必要がある。

#### グリリカスの教訓の原則と応用

私は、ツプィ・グリリカスが言った、共著者がプロジェクト全体に対して共に責任があるというのは正しいと今でも思っている。この原則を厳格に応用すると、スターベルの博士課程の学生と若い共著者たちに不正行為に対する責任を共に持たせ、彼らのキャリアへ広範囲に及ぶ結果をもたらすことになる。私は当初、委員会の他のメンバーに、この原則の応用が我々

の方針であり決定とすべきである、と納得させるように試みた。しかし、彼らは反対し、やがて私の判断に対して原則を緩めるように説得した。結局、我々は博士課程学生に博士課程を（もちろん、捏造した資料を使用しないで）続けることを許し、多大な時間を失ったので期間を1年延長した。

助教たちの状況はより困難だった。彼らがテニユア・トラックを始めてから何年経過したかによってスターベルとの共著をたいてい1本、2本、あるいは3本持っており、それらのすべてが撤回されていた。我々は彼らのテニユア期間を1年延長することをアドバイスしたが、彼ら全員が苦しみ、何人かの若い研究者は研究機関から去った。

#### 他の事例

我々の小さな委員会の議長は法学の教授で、（当然のことながら）手続きについて非常に厳格であり、もう一人の同僚（社会学者）と私を幾度も絶望的な思いにさせた。我々は、全員が完全に不正行為だと確信しているが、実際にはそれを証明できない多くの事例を扱った。それらはすべて証明するのが困難なデータ改竄の事例であった。証明するのが簡単な事例は剽窃であるが、不正行為があったと判定を下したのは、この委員会での私の任期中ただ一度だった。それは過去の博士課程学生で、アメリカの教授がすでに発表したアイデアについて参照をつけずに博士論文に用いた事例であった。この事例は明らかに不正行為だと考えられたが、すでに時間が経過しており、最終判断までに外部の審査員の関与が求められた。いつもながら物事は簡単ではない。この事例においても我々は、元学生の指導教員に落ち度があったかどうか（我々は指導教員に責任があると考えていたが）、それについてどのように対処するかを判断しなければならなかった。最終的には、何を意味するのか明らかでなかったのだが、指導教員に“学術的警告”を行った。そして、これは今もって明らかではない。

ヤン・R・マグナス アムステルダム自由大学客員教授。  
最近の主な著書は *Introduction to the Theory of Econometrics*,  
6th edition, VU University Press, Amsterdam (2021)。計  
量経済学専攻。  
いけふじ・まさこ 大阪大学大学院国際公共政策研究科  
教授。マクロ経済学・環境経済学専攻。